あきたキッズプログラミングアワード

県内の小中学生を対象にしたプログラミングコンテスト「あきたキッズプログラミングアワード」(秋田魁新聞社主催、秋田大、県立大、秋田高専共催)の最終審査が11日、秋田市山王のさきがけホールで開かれた。アイデア部門は大仙市の「神岡ICTラボ・シスターズ」、ソフトウエア部門は広面小6年の佐久間修介君(11)=秋田市=がそれぞれ優勝した。

アイデア部門 **神岡ICTラボ・シスターズ**

ソフトウエア部門 **佐久間君**(広面小)

「みんなのみらい」をテーマに、プログラミングで実現できるアイデアを競う「アイデア部門」と、ソフトウエアのアイデアと完成度の高さを競う「ソフトウエア部門」の2部門で行われた。153組148人の応募の中から、書類審査などを経て選ばれた両部門のファイナリストら5組が優勝を争った。

コンテストは4回目。子どもたちが対面で審査に臨み、その様子を会場で公開するのは初めて。保護者らが見守る中、ファイナリストは大学教員ら審査員5人の前でプレゼンテーションを行った。

神岡ICTラボ・シスターズは、畠山志朋さん(12)=神岡小6年=と莉央さん(9)=同4年=姉妹。電動歯ブラシと連動して歯の健康を維持するアプリを考案した。歯を磨いた回数や磨き残しの箇所をアプリが記録し、歯医者を受診する際には診察から歯科医にデータを送ることができるというアイデアを話した。

佐久間君は、部屋の片付けを習慣化するためのアプリを開発。パソコンで部屋の写真を撮ると、片付けができているかAI(人工知能)が判別、部屋が片付いていると、ゼンで挑み、良い賞を持って帰りたい」と意気込みを語った。(佐沢幸徳)

電動歯ブラシと連動するアプリのアイデアを披露する畠山志朋さん(右)と莉央さん

部屋の片付けを習慣化するアプリについて説明する佐久間君

秋田県を手に入れられるというゲーム要素も持たせた。

両部門を合わせ、最も優れたプレゼンを行った佐久間君は、来年3月に東京国際フォーラム(東京)で開かれる「全国選抜小学生プログラミング大会」に出場する。「全国の優秀な作品にも、熱烈なプレゼンで挑み、良い賞を持って帰りたい」と意気込みを語った。(佐沢幸徳)

デパートへ行って、「何かタダでもらえるものはありませんか?」と聞いてみる

辻秀一

私は幼い頃からどちらかというと真面目なタイプだった。親の言い付けや学校の規則をよく守った。高校を卒業するまで授業をサボったことは一度もないと思う。

この性格のおかげで褒められたり評価されたりしたこともあったのだが、その一方で、大胆さが求められるような場面ではついつい尻込みしてしまう。真面目さが足かせとなり、リスクを伴う決断や自由な行動を妨げてしまうのだ。

スポーツドクターでメンタルトレーニングの専門家でもある辻秀一は、こうした「自分の枠」を壊したいと思うのなら、小さなチャレンジを積み重ねていくことが大切だと説く。チャレンジというと、転職や海外旅行といった冒険ではない。「会議のとき、いつもは最後列に座るのを、あえて最前列に座る」とか、「駅の売店の女性を笑わせてみる」とか、あるいはきょうの言葉のような、日常の中で行えるちょっと勇気が必要な行為のことだ。

成功は問題ではない。このチャレンジは、恥ずかしがらずにやってみることそれ自体に意味がある。その気になれば、難だって自分の枠組みを壊して性格を変えることはできる。そのために必要なのはちょっとした行動の積み重ねなのだ。

(関西学院大教授・矢口誠)

新 きょうの言葉

河野氏(由利本荘市出身)ら選出 学士院新会員

河野元昭氏(日本学士院提供)

日本学士院は12日、2018年度のノーベル物理学賞を受賞した京大特定教授の天野浩名古屋大教授(62)=県立近代美術館(横手市)名誉館長=で日本美術史学の河野元昭静岡県立大名誉教授(80)、美学芸術学の小田部胤久東京大教授(64)、物理学の鈴木厚人早稲田大学長(76)、固体物性学・電子工学の十倉好紀理化学研究所センター長(68)、朝鮮語学の藤本幸夫富山大名誉教授(81)、言語学の吉田和彦防衛医科大教授(68)=嘉堂文庫長・美術館長(79)=ら8人を新会員に選んだ。

会員は計1337人。特別職の国家公務員(非常勤)で任期は終身。

河野元昭(こうの・もとあき)氏。江戸絵画に関して琳派の絵画と能舞台の密接な関係を明らかにした。日本の文人画研究でも高く評価。秋田県立近代美術館名誉館長。由利本荘市出身。

他には生物有機化学の磯崎善一郎奈良先端科学技術大学院大名誉教授(80)、美学芸術学の小田部胤久東京大教授(64)、物理学の鈴木厚人早稲田大学長(76)、固体物性学・電子工学の十倉好紀理化学研究所センター長(68)、朝鮮語学の藤本幸夫富山大名誉教授(81)、言語学の吉田和彦防衛医科大教授(68)。

全国学校給食甲子園 小坂小・中が大村智特別賞 3位相当

地元食材を使った献立のアイデアや栄養バランスの工夫を競う「第11回全国学校給食甲子園」の決勝大会が11日、東京都豊島区の女子栄養大で開かれ、北海道・東ブロック代表として初出場した小坂町の小坂小・中学校は3位相当の「大村智特別賞」に選ばれた。

小坂小・中のメンバーは栄養教諭の加藤佑亮さん(27)と、調理員の細越千尋子さん(59)。加藤さんが原案を考えた献立は「里芋入り炊き込みごはん、桃豚ときのこ炒め物、アスパラのハニーサラダ、うるいのみそ汁、町の花アカシアの蒸しケーキの5品と牛乳」で構成した。蒸しケーキには、児童らが5月ごろに学校の近くで摘んだ花をのせた。

決勝大会には4回の書類審査で選ばれた7校・施設が出場。制限時間の1時間で6品分を作って食味などの審査を受けた。加藤さんは「周囲の支えと、これまで町の学校給食に携わった方々の努力のおかげで受賞できた。感謝の気持ちでいっぱい」と話した。

給食甲子園はNPO法人21世紀構想研究会(東京)主催。書類選考による2次選は、全国1249の学校・施設が応募していた。優勝は兵庫県宍粟市立山崎学校給食センター(高橋秀明)だった。

小坂小・中学校が決勝大会で作った献立(小坂小・中学校提供)

全国学校給食甲子園で3位相当の特別賞に選ばれた加藤さん(左)と細越さん

全国「新聞コンクール」感想文 木村さん(大曲高)に優秀賞

感想文を手に優秀賞受賞を喜ぶ木村さん

日本新聞協会は12日、家族や友人と新聞記事を読んで話し合った感想をまとめる第13回「いっしょに読もう!新聞コンクール」の審査結果を発表した。本県からは、大曲高校(大仙市)の木村夏鈴さん(3年)の感想文が優秀賞に輝いた。

木村さんが選んだのは、インターネット上の誹謗中傷対策として「侮辱罪」を厳罰化する改正刑法が施行されたことを伝える7月7日付本紙の記事。厳罰化は絶対に必要だとの指摘もあることから、「誹謗中傷は表現の自由が脅かされるとの指摘もあることから、「正当な批判」の線引きはどこなのか、と考える巡り合わせ」という。

共に記事を読んだ母親は「正当な批判は事実に基づく建設的な意見であり、誹謗中傷は主観で攻撃する行為だ」と思うとの回答。木村さんはこれを踏まえ、感想文で「匿名だからといって自分の発信内容の責任からは免れることができない」「ネットでは物事を一方向から見るのではなく、多角的視点を持って考えるべき」などとつづった。

3回目の応募で初入賞となった木村さんは「これをきっかけに、私の身の回りの同世代の仲間も新聞に関心を持ち、一緒に考えるきっかけになったらうれしい」と喜びを語った。

同コンクールは全国の小中学生と高校生らが対象。国内外から5万6998点、うち本県からは622点の応募があった。受賞の内訳は、最優秀賞4点、優秀賞30点、奨励賞118点。優秀学校賞は15校、学校奨励賞181校だった。

木村さん以外の本県の受賞者、学校は次の通り。(敬称略)

▽奨励賞=鳴海寿怜(西目中1年)、高橋音羽(大曲高2年)▽優秀学校賞=横手市▽学校奨励賞=横手市▽学校奨励賞=大曲高校

シリーズ 時代を語る

ラジオの時代があった

依本 悟 ①

深夜放送に聴き入り、リクエスト曲が流れるのを待ちわびる。そんなラジオの時代にABS秋田放送のアナウンサーをしていました。愛称は名字を縮めた「依さん」。「サンデー電話リクエスト」の担当といえば、覚えておられるでしょうか。

次々に寄せられるリクエストはリスナー(聴取者)の心模様、さらには情景を映し出していました。歌は世につれ、世は歌につれとはよくいったものです。

昭和39(1964)年の東京オリンピックが大きな転換点でした。高度経済成長を象徴するこの祭典を境に、ラジオからテレビの時代へと入っていきます。「音の世界」から「映像の世界」へと変わっていくのです。

ただ、ラジオがテレビに一気に取って代わられたのではありません。むしろ、ラジオ番組は面白さを増し、リスナーの支持を獲得していきました。ABSはじめ、ラジオ放送会社として発足。テレビ放送が始まるのは35年、カラー化されるのは41年からです。テレビが誕生していく中、兄貴格のラジオが奮闘したといえます。

それを代表するのが、ディスクジョッキー(DJ)やパーソナリティーの登場でしょう。従来アナウンサーは、用意された原稿をいかに正確に滑舌良く読むかが問われていました。これに対してDJやパーソナリティーは、弁放なアドリブを速発し、リスナーを引き付けたのです。

アナウンサー時代を振り返る=秋田市の自宅

映像が大きな力を持つテレビでも、私はアドリブを生かし、徐々に番組制作に携わるようになります。そういえば、アナウンサーをキャスターという、最近では時にマスターオーディエンス(MC)と呼ぶ方も、テレビでもアナウンサーの位置付けが変わってきています。

☆

インターネットや交流サイト(SNS)が普及し、もてはやされる存在。しかしラジオやテレビが人々を魅了した時代があります。今も存在意義が薄れたわけではありません。放送界で長年、アナウンサーとして活躍した依悟さん(81)に半生を語ってもらいます。(聞き手=鈴木亨)

よりもと・さとし 昭和16(1941)年、北海道生まれ。元ABSアナウンサー

内外の歴史

12月13日(火)

【県内】▽2002(平成14)年米の一毒米比率が前年同期に比べて7・4ポイント減の78・9%。カメムシ被害により3年ぶりに悪化のうちとが仙台高裁秋田支部で判明(同10)年、バンコク・アジア大会のレスリンググレコローマン76級で片山貴光選手=秋田商業高=自殺後=が銅メダル▽1996(同8)年 盛岡駅でJR秋田新幹線と東北新幹線の移行作業が秋田車両所の終検査結果で判明▽1998